

森井悦司―日系カナダ人社会のリーダーであり裏社会のボス―

大木 崇

2026 年 5 月

1. はじめに

森井悦司は矛盾を抱えた人物でした。その矛盾は激しく、彼を理解することは、戦時下の日系カナダ人コミュニティそのものを理解するために不可欠です。ある人々にとっては、彼は洗練された協調的なリーダーとして映り、政府当局が信頼し、頼りにするような人物でした。一方で、パウエル・ストリートに暗い影を落とす冷酷な取り立て屋として見られることもありました。これら二つの森井の姿は、別々の世界に存在していたわけではありません。それらは並行して存在し、彼のあらゆる決断や、彼が引き起こした周囲の反応を形作っていたのです。

表面的には、森井は理想的な仲介者のように見えました。彼は戦前のバンクーバーの日本人コミュニティで長年尊敬されており、カナダの当局者にもよく知られていました。RCMP（カナダ王立騎馬警察）はかつて彼を「極めて高潔で協力的」と称賛しており、この評判のおかげで彼は繰り返し重要な役に任命されました。最初は 1941 年の日系カナダ人登録委員会、次に強制移住の混乱した初期の数ヶ月間における日本人連絡委員会の委員長としてです。彼は冷静で礼儀正しく、さらには謙虚ささえ漂わせるイメージを築き上げ、日系カナダ人に道路建設キャンプへの志願や、海外の兵士への物資提供を呼びかける際には、義務、犠牲、忠誠といった伝統的な美德に訴えかけました。この役割において、彼はほとんど不可欠な存在のように見えました。

しかし、その入念に維持された表向きの姿の下には、全く異なる森井が潜んでいました。日本人地区内では、彼は賭博場、社交クラブ、そして非公式な権力者たちと結びついたネットワークの「親分」として知られていました。説得が通じない場合、彼は躊躇なく力行使しました。柔道の訓練を受けた多くの手下たちは、特に強制移住の期間中、威嚇や身体的圧力を用いて彼の意志を貫かせました。強制移動の延期を求めて彼に近づいた住民たちは、同情ではなく、傲慢な態度、怒鳴り声、そして屈辱に直面することが多かったのです。賄賂や汚職の噂は彼の行く先々につきまとい、ヘイスティングス・パークでの虐待疑惑は人々の恐怖をさらに深めました。多くの二世にとって、彼の権威主義的なスタイルと「日本人」としての服従を強要する姿勢は、抑圧的であるだけでなく、根本的にカナダ的ではないと感じられました。

結局、森井の権力は、彼が敗北したからではなく、彼を支えていた世界が消え去ったために崩壊しました。彼の権威は、パウエル・ストリートの密な社会的ネットワーク、その商売、労働関係、そ

して闇経済、に依存していました。1942年に政府が日系カナダ人コミュニティ全体を根こそぎ移住させ、家族を収容所や労働現場に散らしたとき、その基盤は一夜にして崩壊しました。日系カナダ人の家屋、船、事業が強制的に清算されたことで、彼がかつて持っていた経済的な影響力は消え去りました。そして、BC州保安委員会がもはや単一の連絡役を必要としなくなった時点で、彼の公的な役割もまた消滅したのです。

同時に、日系カナダ人自身も彼をますます拒絶するようになりました。トミー・ショヤマのような二世の指導者や、タカイチ・ウメズキのような労働組合活動家たちは、彼が自分たちを代表しているという考えに公然と異議を唱えました。政府の調査により、日系カナダ人の「不忠」に関する噂は否定され、森井の戦時中の権威の正当性そのものが揺らぎ始めました。戦後、プレーリー地方やカナダ東部への分散移住が行われ、さらに1949年まで沿岸部への帰還が禁じられたことで、かつてのバンクーバーのコミュニティを再建することは不可能となりました。領土も、組織も、人口の集中もなくなった以上、森井が指揮を執るべきコミュニティなど、もはや存在しなかったのです。

結局、森井自身もこの事実を認識していたようです。彼は日系カナダ人市民協会を支持し、カナダとの協力を説きましたが、自分自身の戦前の役割を取り戻そうとする気配は微塵も見せませんでした。彼の権力が衰えたのは、彼自身が変化したからではありません。周囲の世界が変わったからでした。

本論考は、指導者であり執行者、愛国者であり日和見主義者、尊敬される人物であり恐れられるボスという、森井悦司の多面的な側面に関する情報を集め、日系カナダ人の歴史において最も激動の一章を形作り、またその一章によって形作られた一人の男の複雑さを浮き彫りにします。



森井悦司（1942年以前）

2. 森井悦司の年表

- **1883 年または 1888 年 7 月 27 日：**森井悦司は日本の広島で生まれました。(注：正確な生年については資料によって 1883 年と 1888 年の両方が挙げられており、矛盾があります)。彼は 10 代後半まで広島で暮らし、柔道の黒帯を取得しました。
- **1910 年代～1920 年代：**バンクーバーのイースト・コルドバ・ストリート 639 番地に居を構え、パウエル・ストリート 366 番地で「モリイ・ブローカレッジ」を経営しました。時が経つにつれ、彼はパウエル・ストリートの裏社会における強力な「エミネンス・グリス（影の支配者）」として広く知られるようになりました。
- **1926 年：**森井とパートナーのリキマツは、パウエル・ストリートに私設賭博場「昭和クラブ」を開設しました。その後、彼は「楽楽」を開業しましたが、これは後に「日本クラブ」と改名されました。
- **1928 年：**森井は、この地域の日本人企業の 20%以上を代表する組織「日本人会」を設立し、その威信を確固たるものにしました。
- **1931 年：**裏社会とのつながりがあったにもかかわらず、森井はカナダ王立騎馬警察（RCMP）による日本人密輸組織の捜査に協力しました。
- **1932 年：**社会的地位の確立を目指した森井は、バンクーバー初の主要な武道道場である「体育道場」の主要な資金提供者兼会長となりました。
- **1936 年：**森井は、柔道の創始者である嘉納治五郎がバンクーバーを訪問した際、その接待に協力しました。施設に感銘を受けた嘉納は、この道場を「気道館」と改名しました。
- **1930 年代後半：**森井は、日中戦争で戦う日本兵のために資金、医療物資、および「慰問品袋」を密かに集めた「バンクーバー緊急委員会」を主導したとされています。この頃、彼は偽造パスポートの発行にも関与していたとされていますが、これらの容疑は立証されませんでした。
- **1941 年初頭から半ば：**その著名かつ恐れられる地位ゆえに、カナダ当局は、日系カナダ人の強制再登録において RCMP を支援する日本人小委員会の 3 人の一世（第一世代）メンバーの一人として森井を選出しました。
- **1942 年初頭：**真珠湾攻撃を受け、カナダ政府は日系カナダ人の強制退去を命じました。森井はコミュニティ内で絶対的な権威を持っていたため、RCMP とブリティッシュコロンビア

州保安委員会（BCSC）は、このプロセスを管理する日系人連絡委員会の委員長に彼を任命しました。

- **1942 年 2 月 22 日：** 政府の道路建設キャンプへの志願者を確保する任務を負った森井は、集会を開き、日本人の「自己犠牲」という美德に訴えかけ、もし失敗すれば切腹すると脅しました。説得が通じないとわかると、彼は力に訴え、柔道部の「副官」たちを使って住民を物理的に威嚇し、従わせました。
- **1942 年 3 月：** RCMP は、ヘイスティングス・パークの収容所待機区域の警備を森井に委任し、3 月 9 日、彼のグループは正式に「戦時保安委員会」として承認されました。しかし、彼の独裁的な手法や、移送延期の見返りに賄賂を要求しているという疑惑に対し、広範な反発が高まりました。
- **1942 年 3 月 29 日～4 月 9 日：** 二世の指導者や帰化日本人協会（キカジンカイ）を含む反対派グループは、森井の悪質な性格と暴力的な過去を理由に、彼がコミュニティを代表する資格はないと公に宣言しました。この反発に押され、BCSC は 4 月 9 日に森井を降格させ、他の正当な団体を対等な存在として認めることで、彼の独占的な地位を剥奪しました。
- **1942 年 5 月 28 日：** 森井の委員会に対するコミュニティの激しい憎悪が移送プロセスを遅らせることを恐れた BCSC は、森井とそのグループをバンクーバーから追放し、人里離れたゴーストタウンであるミント（ミント・シティ）へ突然追放しました。
- **1942 年秋：** 王立委員会による公式の公聴会が開かれ、森井が日本人ファシストであり、避難民を犠牲にして恐喝「組織」を運営していたという疑惑が調査されました。証拠不十分のため、戦時中の破壊活動や犯罪的な恐喝の容疑については最終的に無罪となりましたが、彼の評判は地に落ち、1942 年後半に連絡委員会を辞任しました。
- **1970 年頃：** 森井悦司が日本で死去しました。



森井悦司・きよの銀婚式（1955 年）

3. 日系カナダ人の歴史に関する主要書籍における森井悦司に関する記述の要約

3.1 アン・スナハラ『人種主義の政治学』第3章「追放」（脚注1）

アン・スナハラの著書において、森井悦司は 1942 年に太平洋沿岸から日系カナダ人が強制的に追放された初期段階において、極めて賛否両論を呼ぶ中心人物として浮上しています。バンクーバーのパウエル・ストリート・ゲッターで著名な「影のリーダー」として活動した森井は、2つの社交クラブを運営し、コミュニティ内で大きな非公式な権威を行使していました。この地域的な権力と、結果を出す能力こそが、カナダ王立騎馬警察（RCMP）、特にフレデリック・J・ミード副長官の注目を集めました。ミードは、1942 年初頭の不安定で人種的な緊張が高まった状況を乗り切ることを自らに課し、敵対的な白人過激派による暴力の勃発を防ぐため、日系少数派から平静と全面的な協力を確保する仕組みを模索していました。森井の複雑で、やや好ましくない過去を知りつつも、ミードはこれらの懸念を無関係として退けました。なぜなら、森井は、大成功を収めた戦勝国債キャンペーンを主導するなど、過去の市民活動において、極めて高潔で協力的であることを証明していたからです。その結果、1942 年 1 月、連邦政府は森井を「日本人連絡委員会」の委員長に正式に任命しました。同委員会はアーサー・ニシグチとイッピー・ニシオを加えた 3 名で構成され、ブリティッシュコロンビア州保安委員会（BCSC）と避難民との間の主要な仲介役を務める任務を負っていました。

強制移住の実施にあたり、森井は当初、カナダ政府が西海岸の政治活動家たちをなだめ、より広範なコミュニティを大規模な家族の引き裂きから免れるために、数百人（主に独身日系人男性）を象徴的に移送するにとどまるだろうという、広く共有されていた想定の下で活動していました。彼の指揮の下、日本人連絡委員会は地元の日本人会と緊密に連携し、沿岸部の居住地からの組織的な立ち退きの調整、日本人福祉協会の資金管理、即時移送の延期申請の処理を行いました。しかし、1942年2月中旬、民間企業への雇用計画が実現しなかったことで状況は劇的に変化し、オタワは成人男性である日本人外国人に対し、隔離された道路建設キャンプへの即時配属を要求しました。森井はBCSCから、4月1日の公式期限前に多数の志願者を募集するよう急遽要請されました。

残された家族の経済的安定や身体的福祉に関する政府の保証が全くないため、コミュニティは志願に極めて消極的でしたが、森井は1942年2月22日に緊急のコミュニティ会議を招集しました。この集会で彼は、伝統的な日本の価値観に強く訴えかけ、二世やその広範な家族を守るという大義のために、男性たちに自己犠牲を払うよう懇願しました。家族への支援について地域住民から激しい懷疑や直接的な質問を浴びせられると、窮地に立たされた森井は、もし自分の指導が彼らを裏切ることになれば、切腹をするとまで宣言しました。圧倒的な人格と権威を背景に、彼は2月23日、ブリティッシュコロンビア州レインボーへの自発的な移送に、十分な人数を確保することに成功しました。しかし、その支配力は翌日には崩壊しました。レッド・パスへの次の列車移動に、指定された男性のわずか半数しか集合しなかったからです。1942年2月25日、マッケンジー・キング首相が市民権の有無にかかわらず、すべての日系カナダ人の完全かつ絶対的な強制移住を発表したことで、森井の協力戦略の基盤は完全に崩れ去りました。これにより、少数の独身男性を犠牲にすることでコミュニティの残りを守れるという、森井の核心的な主張は完全に無効化されたのです。

同時に、森井にはバンクーバーのヘイスティングス・パーク・マニング・プールの日常的な運営と警備に関して、絶大な権限が与えられました。1942年3月、家畜小屋や展示施設を粗末に改装した収容施設として開設されたヘイスティングス・パークは、ここに送られてきた家族たちにとって、甚大な精神的・肉体的トラウマをもたらす場所となりました。ミード副長官は、収容所内の秩序を維持し、増え続ける収容者を管理する権限を、森井とその部下たちに明示的に与えました。しかし、収容所内における森井の運営スタイルは、すでに苦痛に満ちた状況をさらに悪化させました。収容者による草の根の取り組みにより、最終的にはトイレの仕切りや食事の改善といった物理的な改善を求める独自の連絡グループが結成されたものの、森井が厳選した部下たちは、組織的な汚職や深刻な権力乱用で頻繁に非難されました。悪臭が漂う過密なコンクリート建造物に閉じ込められた収容者たちは、森井のチームが劣悪な生活環境を改善するための真摯な努力を一切行わなかったと報告しています。その代わりに、森井とその側近たちが、裕福な個人から賄賂を受け取り、過酷

な道路建設キャンプへの動員を一時的に免れるよう不正に手配しているという噂が、収容所内に急速に広まっていきました。

こうした行政上の行為は、日系カナダ人コミュニティ全体における森井への評価を劇的に歪め、彼の立場を伝統的なコミュニティの仲介者から、広く非難される協力者へと変貌させました。クニオ・シミズ（日系カナダ人市民連盟書記）やトーマス・ショヤマ（『ニュー・カナディアン』編集長）らを先頭に立つ、カナダ生まれの二世の若い世代は、大規模な強制退去のずっと前から、森井に対して深い思想的な不信感を抱いていました。彼らは、森井の権威主義的な手法や大日本帝國的な価値観への依存を、根本的に非カナダ的であると見なし、公立学校制度を通じて二世が吸収した民主的で英国的な市民的理想とは鋭く対照的だと考えていました。シミズが地域社会の意思決定会議において二世の意見反映を訴えようとした際、森井はこれをきっぱりと退けました。1942 年 3 月を通じて家族離散という厳しい現実が定着するにつれ、コミュニティが森井に対して示してきた歴史的な寛容さは完全に崩壊しました。彼は、白人政治家たちを宥めるために、自国民を売り渡した政府の「密告者」と見なされ、また、その地位をカナダ市民の公民権を守るためではなく、彼らの服従を強いるために利用していると見なされたのです。

日系カナダ人社会に対する森井の支配構造の崩壊は、1942 年春に頂点に達した、組織化された多世代にわたる政治的反乱によって引き起こされました。森井とは理屈で話し合うことも、内部から改革することも不可能だと悟ったショヤマとシミズは、彼の独裁的な支配に同様に憤りを抱く、帰化した一世の長老たちの連合と手を組みました。3 月中旬、これらの反森井派は、カナダ日系人協会や日系キャンプ・製材所労働者組合を含む 38 の異なる地域団体を動員し、「帰化日系カナダ人協会」（通称キカジン会）を設立しました。同時に、53 の二世団体が「日系カナダ人市民評議会（JCCC）」の傘下に結集し、社会福祉の組織化や強制移住の運営管理を行うための代替体制を構築しました。1942 年 3 月 29 日、この統一戦線はブリティッシュ・コロンビア州保安委員会（BCSC）に正式な書簡を送り、コミュニティ内の対立を公にしました。彼らは、森井がブリティッシュ・コロンビア州の日本人コミュニティを代表していないことを明言し、民主的に選出された代表委員会に代わって、政府が森井の指導権の独占を直ちに解くよう要求したのです。

1942 年 4 月 1 日、これらの決議と代替移送計画が BCSC のオースティン・テイラー委員長に提出された際、テイラーは当初、予算の制約と土地の不足を理由に、代替の物流案を拒否しました。しかし、森井に対する政治的ダメージはすでに取り返しのつかないものとなっていました。BCSC の委員たちは、森井に対する汚職疑惑の高まりを、公には単なる「中傷キャンペーン」として一蹴しましたが、4 月初旬には非公式に厳しい行政上の現実を認識していました。すなわち、森井は被統

治者の支持を完全に失っており、その実権は都市部の第一世代（一世）支持者からなる、ごく小規模で閉鎖的な派閥にまで縮小していたのです。避難政策全体を、広く不信感を抱かれている人物に依存させることは、広範な市民的不服従を招くことを認識した委員会は、1942年4月9日に決定的な政策転換を発表しました。彼らは、BCSCが今後、日系カナダ人のあらゆる正当な団体からの申し入れを受け付けることを発表し、単一の団体をコミュニティの唯一の代弁者として認めることを拒否したのです。

この決定により、森井の絶対的な権限は事実上剥奪されました。彼の委員会は、強制移住に伴う些細な事務手続きや、タシミ収容所の建設に向けた労働力の手配といった業務を引き続き担当することは認められたものの、彼は包括的な政治的影響力を失い、日系カナダ人市民協議会（JCCC）やキカジンカイと同等の、弱体化した立場に置かれました。その後、森井に対する告発について行われた公式調査では、訴追可能な不正行為についてはほぼ無罪とされました——賄賂や権力乱用の告発の多くは根拠のない伝聞に基づいており、戦時中のセンセーショナルな報道に煽られたものと裁定されました——が、その判決は移住を余儀なくされた人々にとっては全く無関係なものでした。1942年4月下旬までに、日系カナダ人コミュニティの枠組みにおける森井の影響力は公式に消滅していました。住民たちは、その機能不全に陥った指導体制を完全に無視し、代わりに「二世集団移動グループ」のような地域密着型の抵抗組織や、完全な自力更生を通じて、差し迫った追放というトラウマを乗り越えようとしたのです。

3.2 ケン・アダチ著『存在しなかった敵』第8章「卑劣で不誠実な10年」（脚注2）

ケン・アダチの著書において、森井悦司は、戦前のブリティッシュ・コロンビア州における日系カナダ人コミュニティ内で、傑出した、極めて影響力があり、かつ物議を醸す人物として浮上しています。バンクーバーのパウエル・ストリートを中心とするビジネス界や賭博界の「影の支配者」——裏で強力な決定権を持つ人物——と形容された森井は、地域社会の構造に対して並外れた権力を振るっていました。彼の評判は極めて賛否両論であり、在住の日本人コミュニティの中では、憎まれ、恐れられ、そして尊敬されるという相反する感情を同時に抱かれていました。

森井のカナダ法執行機関や公式なコミュニティ指導層との関わりは、太平洋戦争勃発の少なくとも10年前から続いていました。連邦当局との最初の注目すべき接点は1931年に生じました。この年、カナダ王立騎馬警察（RCMP）は、日本人移民をカナダへ密入国させていた大規模な組織を摘発しました。この1931年の徹底的な捜査の最中、森井はRCMPに協力を申し出ました。このつながりが、彼と連邦警察との間に長きにわたる交流の歴史を築くこととなったのです。

1930年代後半、日本による中国での軍事的侵略が激化し、カナダ全土で広範な反日感情が沸き起ると、現地の日本人コミュニティは、ますます強まる敵意と、彼らの事業に対する非公式なボイコットに直面しました。1937年の秋、この地域的な反日感情に対抗し、経済的ボイコットを阻止するために、バンクーバー時局委員会が組織されました。森井悦司は、この時局委員会の指導者兼リーダーであると思われていました。彼の指導の下、同団体は単に地域の人種的敵意の拡大を食い止めるだけでなく、日本軍を支援するための物資を密かに集める活動にも従事していました。森井の指揮の下、委員会は資金、アルミ箔、医療用品、そして日本兵に直接送るための「慰問袋」を集めました。この行動は、当時の第一世代の日本人移民（一世）の間に見られたより広範な傾向を反映しており、彼らは日本の軍国主義的な外交政策が正しく、かつ必要であるという疑いようのない信念を抱き続けていたのです。

1941年2月、真珠湾攻撃のわずか数ヶ月前という地政学的な緊張が極限に達していた時期に、森井の影響力はさらに公式なものとなりました。連邦特別調査委員会の勧告を受け、カナダ政府は日系人全員を対象とした強制登録制度を導入しました。この大規模な行政業務を円滑に進めるため、政府任命の常設委員会が日系コミュニティの指導者らと会合を持ち、登録業務の実施において RCMP（カナダ王立騎馬警察）と積極的に協力する5名からなる「連絡」小委員会を設立しました。森井は、アーサー・ニシグチ、野口光次郎という3人の一世代表、およびクニオ・シミズ、トーマス・ショヤマという2人の二世指導者と共に、この日本人小委員会に加わる一世代表の1人として選出されました。

この連絡機関への森井の参加は、日系カナダ人コミュニティ内に以前から存在していた根深い世代間の亀裂を即座に悪化させました。二世のメンバーは、森井と別の日系一世代表に対して、強い憤りと深刻な疑念を抱いていました。この憤りが、小委員会内で激しい人格的・見解の対立を引き起こしました。カナダ政府の常設委員会はこの変化するコミュニティの力学を十分に理解できていませんでしたが、カナダ生まれの二世世代の間では、伝統的で保守的な一世の支配からの独立をめぐる激しい闘争が醸成されつつあったのです。

この内部の摩擦は、国家への忠誠に関する見解の相違に根本的な原因がありました。太平洋戦争が迫る中、二世の指導者たちは、コミュニティの集団的生存のためには、日本が何を行おうとも、カナダへの揺るぎない忠誠を公然と宣言し、それを貫かなければならないと強く信じていました。対照的に、森井や一世の年長世代は、当時、カナダに対してそのような決定的な忠誠を誓うことに全く乗り気ではありませんでした。森井の誠実さへの不信や、伝統主義的な姿勢に象徴される、二世と一世の指導層間のこの深遠な思想的対立は、その年の後半に強制退去の脅威に直面した際、コミ

ユニティが統一された組織的な方針を打ち出すことが完全に不可能であったことを、最終的に予兆するものとなったのです。

3.3 新保 満著（大木 崇訳）、『石をもて追わるる如く』、第6章、第III節（移住）（脚注3）

カナダと日本の間で正式な交戦状態が始まる前から、カナダ連邦政府は在留日系カナダ人人口を管理するための専門的な行政機構の構築に着手していました。1940年後半の「スパーリング委員会」の勧告を受け、1941年1月7日、この少数民族に関する正確なデータを収集するため、専門の統治機関である「ブリティッシュ・コロンビア州東洋人居住者常設委員会」が設置されました。1941年1月8日、マッケンジー・キング首相は、ブリティッシュ・コロンビア州在住の日系カナダ人に対する強制的な「特別新規登録」を発表しました。

『大陸時報』の記録によると、カナダ連邦政府は、この登録手続きの仲介役として、日系カナダ人の主要な交渉担当者グループを一方的に選定しました。森井悦司は、西口幹三、野口幸次郎、清水邦夫と共に、主要な交渉担当者の一人に指名されました。この枠組みの下、ブリティッシュコロンビア州のすべての日系住民は、個人の法的地位、出生国、帰化の有無にかかわらず、1941年3月から8月にかけてカナダ王立騎馬警察（RCMP）に出頭し、詳細な経歴、身体的特徴、指紋の記録を強制されました。

この早期登録により、連邦当局は日系人コミュニティに関する膨大な情報データベースを構築することができ、太平洋戦争が正式に始まった際、極めて迅速に対応することが可能となりました。カナダ政府がコミュニティの代表として森井を選んだことは、根底にあった社会的な亀裂を表面化させました。戦前の伝統的なコミュニティ構造は、長い間、一世（第一世代の移民）による厳格な統制の下で機能していました。しかし、カナダ生まれの二世（第二世代の日系カナダ人）は急速に成長し、英語を完全に流暢に話し、独自の「カナダ人としてのアイデンティティ」を明確に意識していました。

州が森井の指導力を利用しようとしたまさにその時、世代間の自立を示す極めて象徴的な瞬間が訪れました。森井は自身の行政ネットワークを構築するにあたり、著名な二世である石原に接触し、自身と同僚たちと共にブリティッシュコロンビア州保安委員会（BCSC）本部へ同行するよう依頼しました。BCSCの幹部オースティン・テイラーが、森井とその一派が本当に日系カナダ人コミュニティ全体を代表しているのかと石原に直接尋ねたとき、石原は明確に「いいえ」と答え、森井の政府と連携した活動への参加や支持を正式に拒否しました。

宣戦布告直後に日系カナダ人コミュニティの経済基盤が構造的に崩壊すると、社会不安と財政的不安定が住民を襲いました。企業の閉鎖、漁船の差し押さえ、労働者の大量解雇に伴い、従来の指導体制は急速に崩壊しました。この崩壊を受けて、森井悦司とその忠実な一派は、同胞の最善の利益を守るべく独自の内部運動を開始しました。森井は、この危機を乗り切るために、RCMP（カナダ王立騎馬警察）との長年にわたる緊密な関係を積極的に活用しようとしていました。一方、RCMPは、自らの行政目的のために、森井が確立したコミュニティ内での権威を利用しようとしていたのです。

森井は、全面的な強制移住が少数民族に与える、重なる社会的犠牲、文化的根絶、そして経済的破綻を痛感していました。コミュニティが従順な姿勢を示せば全面的な強制退去は回避できるとの信念のもと、森井はあらゆる手段を講じて州の広範な移住命令を阻止しようとして決意しました。彼は、連邦政府の要求を満たす唯一の論理的な道は、州が新たに義務付けた道路建設キャンプで労働する献身的なボランティア集団を提供することだと計算しました。森井は、コミュニティが率先して従順な姿勢を示すことで、反日的な政治的気運を鎮めることができると推測したのです。

しかし、敵対的な風潮や家族の強制的な引き離しを背景に、個人の志願者は事実上皆無でした。この自発的な参加の欠如を克服するため、森井は自身の強大な地元ネットワークに頼りました。森井は対外的には極めて礼儀正しく温厚な態度で知られる人物でしたが、彼は地元の柔道クラブを後ろ盾とする組織の頂点に立っており、そこには体格の優れた若者たちが所属し、定期的に街を練り歩き、その強さを誇示していました。森井はこの組織的な影響力を効果的に活用し、重労働に適した候補者と見なした 150 人の日系住民を厳選して標的にしました。彼は、民族コミュニティ全体の保護のため、これらの人々に当面の個人の自由を犠牲にするよう明示的に求めました。森井のネットワークに内在する強烈な社会的圧力と、その根底にある物理的な強制力のため、標的にされた者たちはこの指示を拒否することは事実上不可能であり、日系カナダ人自身の内部指導部によって、彼らは無事に道路建設キャンプへと送り出されたのです。

森井が対象を絞った労働への従順さを通じて大規模な移送を遅らせようとしたにもかかわらず、2 万人以上の日系カナダ人を対象とした大規模かつ包括的な避難を実行するため、ブリティッシュ・コロンビア保安委員会（BCSC）が設立されました。BCSC は、ヘイスティングス・パーク強制収容所の建設、輸送の管理、そして広範な反乱の防止という、途方もない物流上の課題に直面しました。全面的な抵抗が発生すれば住民を管理できないと悟った連邦当局は、日系カナダ人との意思疎通を図るため、公式の連絡委員会を設置せざるを得ませんでした。

BCSC の代表であるミードは、森井悦司に対し、RCMP（カナダ王立騎馬警察）との長年にわたる緊密な協力関係を理由に、独占的な連絡協定を結ぶよう正式に要請しました。森井はこの要請を受け入れ、公式には「時局委員会」と称する組織を結成しました。しかし、カナダ政府の公式文書では、森井の命名規則を無視し、このグループを明示的に「森井委員会」と呼んでいました。1942 年 3 月 9 日——BCSC が組織として発足してからちょうど 3 日後——に結成された森井委員会には、森井に加え、西口幹三と西尾一平が名を連ねていたのです。

BCSC の行政記録によれば、同委員会には州政府幹部と直接交渉する権利が与えられていました。重要な点として、BCSC は同委員会を正式に雇用しておらず、州も森井に対し、同胞である日系カナダ人に対する法的あるいは公式な執行権限を一切付与していませんでした。委員会の組織的な役割は、住民の集団的な不満や要望を BCSC に伝えることに厳格に限定されていました。こうした公式な法的権限の完全な欠如にもかかわらず、森井の部下や執行担当者は、あたかも委員会がコミュニティに対して絶大な統治権限を持っているかのように振る舞ったのです。

強制移住の現実が深刻化するにつれ、必死の同胞たちが基本的な行政上の救済や移動期限の延長を求めて、森井委員会の事務所に殺到するようになりました。個人が面会を求めようとすると、森井の攻撃的な部下たちは常にリーダーを隔離し、「ボス」は一般のコミュニティメンバーと会うほど暇ではないと叫びました。絶望的な市民がしつこく迫ると、執行役たちは彼らを「うるさい」と罵倒しました。

こうした不当な扱いの具体例は、有賀千代吉の歴史記録『ロッキーの誘惑』に記されています。ここでは、妻がハイリスク妊娠の最終月に入り、出産間近であるため、一時的な避難延期を認めてほしいと森井委員会に懇願する同胞の姿が記録されています。森井の攻撃的な部下の一人は、この医療上の嘆願を即座に完全に退け、夫に対し「お前が産むわけじゃないだろう？」と冷酷に言い放ちました。こうした出来事は森井自身の直接的な関与によるものではありませんでしたが、住民全体に広がるパニックにより、こうした制度的な屈辱に対する集団的な非難は、まさに森井自身に降りかかったのです。

日系カナダ人コミュニティ全体における森井委員会の構造的な不人気は、深刻な地政学的混乱と激しい感情的な不満によってさらに悪化していました。日系カナダ人たちは自らの置かれた状況に深く苛立ちを募らせていましたが、BCSC や広大で形のない白人多数派に対して、物理的に戦うための直接的かつ現実的な手段を何も持っていませんでした。その結果、森井委員会が物理的に手の届く範囲で活動する、目に見える具体的な存在として浮上すると、コミュニティは集団的な怒りの矛先をそこに向け、同委員会を攻撃しました。戦前、森井の権威を支えていた伝統的な経済的・社会

的基盤が完全に崩壊していたため、コミュニティ内部からの彼の指導力に対する攻撃は、かつてないほど容易かつ効果的になったのです。

森井の国家に迎合する手法に対する声高な批判者たちは、急速に全く別の国内抵抗運動を組織し、BCSC と独自に交渉する権利を勝ち取りました。BCSC は森井に対して真の個人的忠誠心など抱いていませんでした。委員会の唯一の活動目的は、全住民の迅速かつ平和的な避難完了にありました。国家当局は、自らの物流上の目標を達成するために、もう一つの協力的な内部派閥を利用することに全く躊躇しませんでした。これは、事実上「分断統治」の手法を用い、少数民族を分裂させるものでした。

1942 年 5 月下旬までに、森井委員会に対するコミュニティ内部からの批判は極めて激しくなり、BCSC は、森井が沿岸に留まり続けることが、内部での大幅な遅延を引き起こし、全国的な避難スケジュールを危うくするのではないかと懸念しました。このリスクを排除するため、BCSC は 1942 年 5 月 28 日、森井とその直属の組織者グループを沿岸防衛地帯から強制的に移送し、ブリティッシュコロンビア州内陸部の僻地にある廃鉱町ミントへ追放したのです。

主要な活動拠点から物理的に排除された後、森井は自らの指揮下に残った有力な執行者や要人たちに、管理運営の意向を正式に委ねました。この委任体制の下、彼の組織の残党は、1942 年 10 月に沿岸部の日系カナダ人住民の完全な強制移住が公式に完了するまで、「保安委員会」の名の下で活動を続けました。

3.4 森井悦司に関する記述の類似点と相違点

3 人の著者はいずれも、森井悦司が日系カナダ人コミュニティとカナダ政府の間の連絡役となった経緯、そして強制退去の影響を最小限に抑えようとした森井の構想が、日系カナダ人コミュニティからの支持が限られていたこと、およびカナダ政府の方針変更により、部分的に失敗に終わったことを記述しています。こうした変化の背景には、カナダ政府の反日政策への対処法をめぐり、一世と二世の間に生じた溝の拡大がありました。興味深いことに、強制移住前およびその初期段階において日系カナダ人コミュニティの目立つ存在であった森井悦司は、ミント市へ移住した後、そのコミュニティからほぼ完全に姿を消していました。

これら 3 人の著者が森井悦司について記述している点における共通点と相違点は、以下の表にまとめられています。

項目	アン・スナハラ	ケン・アダチ	新保満
パウエル・ストーリー裏社会における森井の役割	2つの社交クラブを運営する著名な「影のリーダー」	ビジネス界や賭博界の「影の支配者」	地元の柔道クラブを後ろ盾とする組織のトップ
連邦当局が森井を連絡役に選んだ理由	市民活動において「極めて高潔で協力的」と証明されていたため	1931年の日本人密輸組織捜査におけるRCMPへの協力実績	RCMPとの長年にわたる緊密な関係
コミュニティ内での森井への評価	二世からは不信感を持たれ、後に政府の「密告者」と見なされる	憎まれ、恐れられ、そして尊敬されるという相反する感情	対外的には礼儀正しく温厚だが、裏では強大なネットワークを持つ
世代間の亀裂に関する記述	清水やショヤマなどの二世世代が森井の権威主義的スタイルに強く反発	登録手続きをめぐり、二世メンバーと一世代表の間で激しい対立	英語を話し、カナダ人としてのアイデンティティを持つ二世の成長
森井の指導力の崩壊プロセス	キカジン会やJCCCによる統一戦線が結成され、BCSCが独占権を剥奪	強制退去の脅威に直面した際、コミュニティの統一方針が構築不能に	住民の怒りの矛先が森井委員会に向かい、別個の抵抗運動が組織される

項目	アン・スナハラ	ケン・アダチ	新保満
戦時中の追放先	BCSC により、内陸部の僻地にある廃鉱町ミント（ミント・シティ）へ追放	記述なし	BCSC により、内陸部の僻地にある廃鉱町ミントへ追放

4. キャメロン調査（脚注4）

1942 年、バンクーバー・ニュース・ヘラルド紙は、森井悦司を非難する記事を頻繁に掲載しており、その見出しには次のようなものがありました。

- 「日本人夫婦、森井が釈放の代償として貢ぎ物を要求したと主張」
- 「森一味、日本人児童を恐怖に陥れる」
- 「バンクーバーの日本人、第五列の活動が危険だと懸念」

しかし、バンクーバー・ニュース・ヘラルド紙はさらに 2 つの一面記事を掲載しました。

- **1942 年 9 月 26 日** — 「ブリティッシュ・コロンビア州内で活動する日本のブラックドラゴン」
- **1942 年 10 月 9 日** — 日系カナダ人が「ホープ収容所への移送を嫌がっている」と主張する続報

これらの記事は次のように主張していました。

- 「日本のファシスト的な団体」が BC 州で活動していた
- その団体は日本の黒龍会と「直接的な関係」にある
- 森井悦司はこの組織と関係があった

これらの告発は国家安全保障および『カナダ防衛規則』の運用に関わるものであったため、司法大臣は完全かつ公平な調査を命じました。これはキャメロン調査と呼ばれました。これはバンクーバ

ー・ニュース・ヘラルド紙の2つの記事に対する連邦政府による正式な調査でした。調査委員会の構成は以下の通りでした。

- J.C.A. キャメロン判事を委員長とする
- ニュース・ヘラルド紙側：ファリス上院議員 (K.C.)、C.L. マカルパイン (K.C.)
- BC 州保安委員会および RCMP
- 森井悦司（代理人：A・ブル弁護士）
- 日系カナダ人諮問委員会のメンバーは出席したが、弁護士による代理人はおらず、田中治太郎もその一人であった。

調査は1942年10月3日に開始され、1942年11月21日に終了し、以下の事実が判明しました。

(1) 黒龍会の活動に関する証拠はない

キャメロンは、同紙の主張には根拠がないと判断しました。証人らは、以下の点について信頼できる証拠を提示しませんでした。

- ブリティッシュコロンビア州で黒龍会の支部が活動していたこと
- 森井が会員または代理人であったこと
- 地域社会において組織的な日本人過激派の活動が存在したこと

調査の結果、これらの申し立ては根拠がないと結論づけられました。

(2) 森井の評判が疑惑に影響

調査では、賭博、裏社会とのつながり、地域社会における影響力といった点で、森井に物議を醸す評判があったことは否定されませんでした。これらはいずれもスパイ疑惑を裏付けるものではありませんでした。（この背景情報は、調査自体ではなく、より広範な歴史的研究に基づくものです。）

(3) 新聞報道は無責任だった

キャメロンは、証拠のないセンセーショナルな主張を掲載した『ニュース・ヘラルド』紙を批判しました。特に戦時中、そのような主張は国民の恐怖や偏見を煽りかねない状況下でのことだったからです。

キャメロン調査が重要な理由は以下の通りです。

- 戦時中のヒステリーの中で、噂と証拠の間にどれほどの隔たりがあったかを示しているからです。
- これは、反日感情が最高潮に達していた時期でさえ、連邦政府が適正手続きの必要性を認識していたことを示しています。
- これは、日系カナダ人をめぐる「ブラック・ドラゴン」陰謀説を明確に否定した、稀有な公式記録です。
- 特に森井の場合、この調査によってバンクーバーの日系カナダ人コミュニティのリーダーとしての評判が回復したわけではありませんが、最も深刻な政治的・スパイ活動に関する嫌疑は晴らされました。

5. 1947 年秋、森井悦司はブリティッシュコロンビア州ダーシー近郊の製材所で日本人労働者を管理していた

これは、私がこれまでに発見できた、戦後の森井悦司に関する唯一の記述です。

5.1 森井は 1942 年 5 月、ミント・シティへの移住を余儀なくされた

アン・スナハラによれば、1942 年 5 月下旬までに、森井委員会に対するコミュニティ内部からの批判は激化の一途をたどり、BCSC は、森井が沿岸地域に留まり続けることが、内部での大幅な遅延を引き起こし、全国的な強制移住のスケジュールを危うくするのではないかと懸念しました。このリスクを排除するため、BCSC は 1942 年 5 月 28 日、森井とその直属の組織者グループを沿岸防衛地帯から強制的に移住させ、ブリティッシュ・コロンビア州内陸部の僻地にある廃鉱の町、ミント・シティへ追放したのです。

5.2 ミント・シティの自給自足キャンプ（脚注 5）

ミント・シティは、ブリティッシュ・コロンビア州リルーエット地域にある廃墟となった金鉱の町でした。1942 年までに鉱山は閉鎖され、町は無人となっていました。日系カナダ人が沿岸部からの退去を命じられた際、多少の貯蓄があった約 25 世帯が、政府の収容所へ送られるよりはと、この地への移住を交渉して実現させました。この地域には、イースト・リルーエット、ブリッジ・リバー、マクギルブレイ・フォールズなど、他にも自給自足のキャンプが存在しました。ミント・シティは、電気や屋内水道が整備され、既存の家屋も残っていたため、他のキャンプよりも居住に適していました。

最盛期には、ミント・シティには約 325 人の日系カナダ人が暮らしていました。これらの家族は、バンクーバーのパウエル・ストリート地区、キッツラノ、グランドビュー、マーポール、スティーブストン、プリンス・ルパート、ケマイナス、カンバーランドから移ってきました。住民の中には、事業主、製材所経営者、医師、漁業のリーダーなど比較的裕福な人々もいれば、自給自足ステータスの経済的基準を満たしていたものの、労働者階級の家族もありました。

ブリッジ・リバー～リルーエット地域は、戦時中に小さな経済拠点となりました。自立生活世帯には収入が必要であり、この地域には彼らを雇用できる既存の産業があったからです。ブリッジ・リバー地域は森林に覆われており、ミントや近隣の自立生活キャンプに住む日系カナダ人にとって、林業が有給労働の主な源泉となっていました。

日系カナダ人が林業の仕事に就けた理由は以下のとおりです。

- この地域は辺鄙で、労働力が不足していたためです。
- 日系カナダ人は、戦前に林業や製材業で培った豊富な経験を持っていたためです。
- 自給自足の家族には収入が必要であり、民間雇用主のもとで働くことが認められていたからです。

これらの自給自足キャンプに住む家族にとって、林業の賃金はしばしば現金収入の主な源でした。

5.3 1947 年の秋、『ニュー・カナディアン』紙の記者が森井悦司にインタビューを行った

1947 年の秋、『ニュー・カナディアン』紙の記者であるケイシー・オヤマがダーシー（D'Arcy）を訪れ、森井悦司氏にインタビューを行いました。彼はこのインタビューを 1948 年 1 月 10 日付の『ニュー・カナディアン』紙で次のように報じています。

私がバシフィック・グレート・イースタン鉄道の線路沿いを北上したのは、2 つの理由がありました。1 つは、スクアミッシュから線路を 83 マイル北上したダーシー近郊で製材所を営んでいると聞いていた森井悦次氏を訪ねたかったからです。2 つ目の理由は、リルーエットを訪れるためでした。

私はそれまで森氏とは面識がありませんでしたが、他の誰もがそうであるように、彼については多くの噂を耳にしていました。

彼が強制退去前の日本人コミュニティで最も影響力のある人物だったことは知っていました。彼は恐れられ、同時に尊敬されていました。多くの人が様々な理由で彼に恩義を感じていました。そし

て多くの人が、彼の隠された活動や、RCMP（カナダ王立騎馬警察）との噂のつながりについて、ひそひそと語り合っていました。

強制移住の時、日本人コミュニティが崩壊した際、森井は日本の黒龍会のメンバーであると告発され、一部の日本人が公聴会に出頭して森井に不利な証言をしました。しかし、何も立証されず、捜査は立ち消えになりました。

私はこの人に興味を持ちました。彼の将来の計画が何なのか、そして過去をどう思っているのかを知りたかったのです。

森井氏は小柄で痩せた体格の、59 歳か 60 歳くらいの男性でした。

私が訪ねて自己紹介すると、彼は完璧な礼儀正しきで、温かく迎えてくれました。彼は全く気取らず、その日本的な謙虚さに、私は少し気まずさを感じたほどです。

彼は静かな威厳と頑固さを漂わせていました。時折、その瞳に鋼のような輝きを捉えた気がし、かつてのボスであり、「ベルベットの手袋」の手法に長けた人物だったと想像しやすくなりました。

私は彼に、ブラック・ドラゴンに関する捜査についてどう思うか、率直に尋ねました。彼は自分を正当化しようと直接的な努力はしませんでした。しかし、この件についての考えをかなり詳しく述べ、14 歳頃からカナダに滞在し続けているため、ブラック・ドラゴン・ソサエティのような東洋人限定の組織の会員資格があるとは到底考えられない、と結論づけました。

彼は、63 マイルのキャンプをしばらくの間維持するつもりだと語りました。

彼はデヴァイン（Devine）（脚注 6）という名の大きな製材所との特別契約の下で労働者の訓練を受けもっていました。彼はデバイン社の信頼を得ており、自宅を建設中でした。彼もまた、年を重ねつつありました。

地元の人員に加え、約 30 人の日本人を雇用しているこの製材所は効率的に運営されており、この地域には、現在の操業ペースであれば少なくとも 10 年間は製材所に供給できるだけの木材があると言われているそうです。

私は森井氏に、戦後の日系人コミュニティにおいて、誰かが森井氏の役割を担うことになるのかと尋ねました。

森井氏そうは思いませんでした。重要なのは、戦前の日本人コミュニティの大部分が築かれていた保守的な基盤が失われてしまったということです。森井氏自身もそうでした。日系カナダ人の福祉は、日本との絆を維持することではなく、他のカナダ人と協力することにあると彼は述べました。

森井氏は、日系カナダ人市民協会（JCCA）の活動を支持していると述べました。

森井氏と別れる際、私は彼の新たな挑戦と新しい世界での成功を祈りました。彼は現在の仕事に不満はなく、戦前のパターンへの回帰を望んでいないと私は信じています。たとえ望んだとしても、古いパターンはもはや存在しないのですから、それは無駄なことなのです。

5.4 森井悦司とバンクーバーにおける柔道の発展

森井悦司は、バンクーバーにおける柔道の初期発展において、重要でありながらしばしば過小評価されがちな役割を果たしました。彼は指導者でも技術的リーダーでもありませんでしたが、カナダにおける柔道の形成期に佐々木重孝（スティーブ）に対して提供した財政的・社会的支援を通じて、その影響力は感じられました。1924年に佐々木がカナダ初の道場「泰育道場」を開設した際、その運営は小規模で財政的にも不安定であり、佐々木の私財に大きく依存していました。柔道への関心が高まり、より広くて持続可能な練習場の必要性が明らかになるにつれ、森井は、この拡張を可能にしたバンクーバーにおける柔道の主要な支援者として頭角を現しました。パウエル・ストリートにある有名な「昭和クラブ」をはじめとする自身の事業から得られる多額の収入を原資として、森井は佐々木が日系カナダ人コミュニティの中心地に第二の道場を設立できるよう資金援助を行いました。彼の支援は、家賃、用具、運営費といった必須経費を賄うものであり、これらがなければ佐々木が単独で負担することは困難だったでしょう。

森井は単なる遠方の後援者にとどまらず、柔道界の活動に積極的に参加し、佐々木や他の地域リーダーたちと共に公の場に姿を見せました。これにより、パウエル・ストリート地区における彼の存在感と影響力はさらに強まりました。彼の後押しは、日系カナダ人の若者たちの間で柔道の認知度を高める一助となりました。彼らの多くは、もともと森井の交友関係の中にいた人々でした。こうした資金援助と個人的な関与を組み合わせることで、森井は、ほとんどの道場が存続に苦闘していた時代に、柔道の安定と発展に貢献しました。彼の支援は間接的に、後にスティーブストンやブリティッシュコロンビア州の他の地域への柔道の普及を可能にし、やがて全国的な柔道運動が築かれることになる基盤の一部を形成したのです。

同時に、森井の関与には複雑な側面もありました。賭博やその他の裏社会とのつながりを持つ「地域の強者」としての評判は、日系カナダ人コミュニティのより保守的なメンバーの間で緊張を生み

ました。彼らの中には、たとえ間接的であっても、柔道が森井の事業と結びつくことに不安を抱く者もいました。こうした懸念は、戦時中に彼が日系カナダ人連絡委員会の委員長を務めたことでさらに強まり、彼の遺産をさらに複雑なものにしました。とはいえ、バンクーバーにおける柔道の初期発展という特定の文脈においては、森井の貢献は大きかったと言えます。佐々木がカナダに柔道をもたらすためのビジョン、指導力、技術的専門知識を提供した一方で、森井はそのビジョンが最も脆弱な時期に根を下ろし、成長するための物質的支援を提供したのです。

5.5 昭和クラブ

森井悦司が所有・経営していた昭和クラブは、戦前のバンクーバー、パウエル・ストリート地区で最も悪名高い施設の一つであり、違法な賭博場として機能するとともに、日系カナダ人コミュニティにおける森井の影響力の中心拠点となっていました。パウエル・ストリート 300 番地に位置するこのクラブは、当局にも住民にも「日本人賭博場」として広く知られており、バンクーバーにおける「日本人アンダーワールドの強力なリーダー」としての森井の評判の大きな部分を形成していました。昭和クラブは多額の収益を生み出し、森井はそれを用いてコミュニティ内での権威を固め、合法・非合法を問わず様々な活動を支援しました。その広範な影響の一例として、森井は昭和クラブからの資金を用いて、パウエル・ストリートに開設された佐々木重孝（スティーブ）の 2 つ目の柔道道場の主要な後援者となり、カナダにおける柔道の初期発展に財政的安定をもたらしました。

昭和クラブの運営は、森井の複雑でしばしば物議を醸す立場の一因となりました。多くの日系カナダ人は、彼の賭博事業、犯罪組織とのつながりの噂、過去の暴力事件への関与を理由に彼を疑いの目で見ると一方で、パウエル・ストリート地区において彼が実権と影響力を握っていることを認める者もいました。当時の警察や政府の報告書は、彼を地下組織とのつながりを持つ人物であり、地域社会に対して相当な支配力を行使する人物として描写しています。彼の立場は、日系人協会などの地域団体における役割によってさらに強固なものとなりました。同協会では、海外駐留の日本兵のために物資や支援物資を集める「時局委員会」の設立を支援しましたが、こうした活動は政治的に敏感なものであり、時には輸出規制に背いて行われることもありました。

パウエル・ストリートの社会構造において、昭和クラブは、カフェ、下宿屋、商店、娯楽施設からなる広範な生態系の一部であり、1942 年以前、この地域を日系カナダ人の生活の活気ある中心地としていました。口述歴史によれば、パウエル・ストリートの 300 番街区には、森井が関与していたものを含め、いくつかの賭博場があり、労働者や漁師、そして娯楽を求めていたり、厳しい経済状況からの逃避を望んでいた地域住民たちが頻繁に訪れていました。昭和クラブは違法でしたが、当

時は珍しいことではありませんでした。賭博場は近隣で半ば公然と営業しており、日常生活のリズムに溶け込んでいたのです。

要するに、昭和クラブは単なる賭博場以上の存在でした。それは、戦前のバンクーバーにおいて、森井悦司が経済力、社会的影響力、そして政治的発言力を行使するための重要な拠点でした。その収益は柔道の普及といった地域活動の資金源となり、一方でその悪名は、森井を「恩人」であると同時に「恐れられる裏社会の人物」として位置づける一因となりました。同クラブの存在は、パウエル・ストリートにおける戦前の日系カナダ人コミュニティの複雑さを反映しています。そこでは、合法的な文化施設と違法な事業が共存し、1942年の強制移住に至るまで、この地域の特色を形作っていた。

6. 日系人博物館所蔵の森井悦治に関する書簡

日系人博物館には、森井悦治に関する書簡が数通所蔵されている。その例をいくつか紹介する。

6.1 1942年2月20日付、森井悦治から宮川捨吉への書簡

一九四二年二月二十日

森井 悦治

宮川捨吉殿

拝啓

御承知の通り、当カナダ防衛地域からの立ち退き件は、総督令をもって成文化され、事態は極めて急を告げている。

つきましては、この件について折を見てご相談申し上げたいところであるため、本書状着き次第、市内アレキサンダー街 362 番地の日本倶楽部までご足労を煩わす件、お願い申し上げます。

森井 悦治

大木崇による注記

これは、私がこれまでに発見できた森井悦司による唯一の手紙です。宮川捨吉、バンクーバーのデイヴィー通り 614 番地（614 Davie St., Vancouver, B.C.）で、「Davie Confectionery」という菓子店（兼食料品店）を営んでいました。

6.2 1940 年 8 月 21 日付、F.J.ミード副長官からカナダ王立騎馬警察（R.C.M.P.）長官宛ての手紙（1 ページのみ。2 ページ目と 3 ページ目は欠落している。）

機密

S. 49.

40D 10U7-J-1.

長官の

個人的な閲覧用。

ブリティッシュコロンビア州バンクーバー、8 月 21 日、

1940 年。

総監殿、

カナダ王立騎馬警察（R.C.M.P.）、

拝啓：

件名：ブリティッシュ・コロンビア州における日本人情勢。

1. 上記件名に関する我々の会話について：私がバンクーバーに到着して以来、フリップス警部補とこの件について徹底的に協議した。また、ヘンリー巡査は、異なる日にわたり、森井肇氏と 3 回にわたり長時間の会話を交わした。
2. 私は森井氏に貴殿からの挨拶を伝えたところ、彼は貴殿の話聞いて大変喜んでいて。彼は直ちに、自身の協力を惜しまないと申し出るとともに、現在英国と日本帝国との間に存在する緊張関係の結果として敵対行為が発生した場合でも、カナダにおいて日本人側による不測の事態は起こらないと私に保証した。これらの会話の場に貴殿も同席できていれば嬉しかったのだが、フリップス副警視と私と同じく、カナダにおける日本人からのトラブルは予想されないと確信できる具体的な保証が得られたと、貴殿も感じただろうと思う。これは大げさな言い方だと承知しているが、同時にそれが真実であることも知っている。
3. 森井氏は、君も過去の経験から承知の通り、カナダにおける日本人社会のあらゆる分野で多大な影響力を持っている。私が聞くところによれば、この影響力は我々がブリティッシュ・コロンビア州を去ってからの数年間でさらに強まったようだ。彼が私に君へ伝えるよう求めた確約は、以下の通りである：-

(a) ブリティッシュコロンビア州の日本人たちは、自分たちと子供たちの未来がカナダ国民の運命と密接に結びついていると信じており、それゆえにカナダの利益は彼らの利益でもある。

(b) カナダ在住の日本人 23,000 人のうち、12,714 人はカナダ生まれ、2,158 人は帰化者であり、残りは日本生まれである。注：（これらの数字はカナダ日系人協会による調査の結果であり、カナダにおける日系人の人口として引用される他の数字ほど高くはないものの、...

6.3 1942 年 6 月 2 日付、カナダ王立騎馬警察（RCMP）の S.T.ウッド長官から労働省次官補 A.マクナマラ宛ての書簡

マクナマラ殿、

1. 先月 23 日付の貴殿の書簡に同封された書簡で言及されている日本人、森井悦司は、当警察に雇用されたことはなく、過去にも雇用されたことはない。しかし、ブリティッシュ・コロンビア州保安委員会は、太平洋沿岸からの日本人強制退去に関連して、彼の協力を得ていた。

2. この強制退去の初期段階において、森井は日本人長老からなる小委員会の委員長を務め、委員会と日本人コミュニティとの連絡役を務めた。彼は信頼でき、誠実で、忠実であると認められていた。しかし、ある時期より、二世（英国臣民）らは、日本人コミュニティにおける彼の主導的立場に反対することを決め、その目的のために、日本人社会で活動していた白人宣教師グループや、政治家を含むその他の人物らの支持を求めた。彼らは、森井に対する中傷キャンペーンにこれらの人物を利用し、その結果、彼は現在、日本人コミュニティにおいてほぼ信用を失うに至っている。我々は、このようなキャンペーンが行われることをかなり前から警告されていた。彼に関する匿名の手紙がブリティッシュコロンビア州保安委員会に送られた。彼はギャンブラーであり、キリスト教徒ではなく、不忠実であるといった告発がなされた。

3. 森井は自身に対する中傷キャンペーンを十分に認識しており、この件については彼と何度も話し合ってきた。森井に対する告発を裏付ける証拠は存在しない。もっとも、彼がかつてギャンブラーであったことは事実であり、この点において彼の過去はやや不愉快なものだ。しかし、委員会や警察とのあらゆるやり取りにおいて、彼が極めて誠実かつ協力的であったという事実は変わらない。この陰謀には、検閲官による検査を免れるため、保護区域外のような様々な地点から森井宛てに親密な内容の手紙を郵送する手口も含まれている。これらの手紙は、もちろん架空の人物である差出人が、森井と共に何らかの破壊活動に従事していることを示唆するものだ。委員会はこの件について十分に報告を受けており、検閲局に対しこの点について連絡するよう要請した。この措置はすでに講じ

られている。したがって、貴殿からの連絡および添付書類は、我々にとって驚くべきものではない。

敬具

S.T.ウッド

委員長

脚注

- **[1]** アン・スナハラ『人種主義の政治学：第二次世界大戦中の日系カナダ人の強制移住』第3章「追放」（トロント、Lames Lorimer and Company、1981年）
- **[2]** ケン・アダチ『存在しなかった敵』第8章「卑劣で不誠実な10年」（トロント：マクレランド&スチュワート、1976年）
- **[3]** 新保 満著（英訳：大木 崇）、『石に追われるように』、第6章、第III節。エドモントン日系カナダ人協会のウェブサイトでデジタル版が閲覧可能。日本語の原著は1975年にトロントの大陸時報社から出版された。
- **[4]** J.C. 田中によるキャメロン調査報告書。大木隆のウェブサイト japanesecanadians.ca にある田中治太郎の「ブラック・ドラゴン調査報告書」を参照。
- **[5]** ミント・シティの自給自足キャンプ、『カナダの史跡』ウェブサイト、ミノ・マイン
- **[6]** ブリティッシュ・コロンビア州デバイン。ウィキペディア「ブリティッシュコロンビア州デバイン」

デバインという地名は、アンディ・デバインが経営していた製材所に由来します。この製材所では、ブリティッシュコロンビア州沿岸から100マイルの「隔離区域」のすぐ内側にあるマクギリヴレイ・フォールズ（現在のマクギリヴレイ）へ、日系カナダ人収容所から移住させられた日系カナダ人が雇用されていました。デバインが、海岸部で経験豊富な伐採工や製材所労働者であった日本人たちを雇うことができたのは、1960年代まで海岸部への道路が開通しておらず、この地域へは鉄道でしかアクセスできなかったためです。デバインの郵便局は1951年に開設され、1964年に閉鎖されました。デバイン周辺の森には今も製材所の跡が残っており、つい最近まで、アンディ・デバインの製材所にあった古いボイラーは、この地域で最も高い人工構造物でした。現在のデバインは、通年居住者が数名いるレクリエーション・コミュニティとなっています。

